白鳥の童女

東京女子高等師範學校教諭兼教授　石井庄司

一

例の如く常陸國風土記を開いてみると、香島郡の白鳥（しらとり）の里の傳説のところが出てきた。

そこに記してある古老の話によると、むかし垂仁天皇の御世に、白鳥があつて天から飛び來り、化して童女（をとめ）となつた。そして夕方になると天に昇り、朝方になるとまた天から降りて來るのを常とした。石を採つて池を造り、その堤を築かうとした。ところが徒に月日を費すばかりで出來上らない。童女等は

しろとりのはがつつみをつつむともあらふまみうきはこえ……

と歌を唱へて天に昇り、そして再び降りて來なかつた。そこでその所を白鳥郷といふのことである。

古老の話は唯これだけで、單に白鳥といふ郷名の由來を説明するに過ぎないものである。所謂白鳥處女傳説の一の型のものであらうが、「羽衣」のやうに漁夫も出て來ないし、羽衣もない、從つて面白味も少い。殊に童女の歌の詞は「白鳥の羽が堤を包むとも」といふ前半分だけはどうやらわかるが、後半「あらふまみうきはこえ」は意義不明である。傳へがしつかりしてゐず不完全な説話である。

然しさういふ不完全なものながら、此の話にはまた此の話なりの單純な素撲味があつて、どことなく捨て難いものがある。

白鳥が飛び降りてきて童女となつたが、夕方になると天に昇り、翌朝は再び降りて來る。即ち「夕に昇り朝に降る」といふことを繰返すのである。それが面白いと思ふ。

池を造り、堤を築かうとしたが、月日を經るばかりで成功せず、そこで遂に天に昇つて再び降りて來なかつたといふのは、下界に即ち地上界に何かよくないことの起つたことを示してゐる。これは羽衣を漁夫に取られたといふことは違つたものであるが、兎に角よからぬ事の出來たことを示してゐる。池を造り堤を築くといふ農業といふ人間の生活に非常に近いことを物語つてゐるところに、現實性があり、また當時の説話者の生活環境をも物語るものである。

一體古風土記には、白鳥に關する傳說が多く收められてゐる。就中最も有名なのは、餅の的の話であらう。これは風土記逸文の一で、神名帳頭註或は諸社根元記等に見えるもので、山城風土記にあつたものである。稻荷の社の緣起を述べる話で、秦中家忌寸等が遠祖伊侶首の秦公は、稻を多く所有してゐて富裕であつた。そこで多くあるにまかせて、餅を的としたところが、忽ち的は白鳥となつて、飛び去り、山の峰に至つて、そこに稻が生えた。そこで社の名としたといふのである。

これは現存の豐後國風土記にも同樣の話が見えてゐる。むかし郡內の百姓、この野に住み多く水田を開き、糧食を餘して畝にさごめ、甚だ富裕となり、遂に奢る心が出てきて、餅を作つて矢を射る的とした。ところが餅は忽ち白鳥となつて南方に飛び去つた。その年の中に、百姓は皆死に絕えて、遂に田は荒廢に歸したといふのである。(これは秋の稻の實る頃に、子供に話すのによい話と思ふが、いまは誓くおく)。

同じく豐後國風土記には、白鳥の話がある。これは白鳥が北から飛び來つて、村に集りその鳥が餅となり、更にしばらくの間に數千株の芋となり、それが冬季になつても枯れなかつたので、これは「至德のしるし乾坤のしるしなり」として、朝廷に奏聞した。天皇は詔して、「豐の國」となさつたといふ。

もう一つは、近江國伊香郡與胡の鄕伊香の小江の話で、完全な白鳥處女傳說である。八人の天女が白鳥となつて天から降り、伊香の小江の南の津で水浴をしてゐた。時に伊香刀美といふ者があり、西の山にあつて遙かに白鳥を見て、その形のめづらしいのを賞でて、これは神人であらうかと疑ひ、行つてよく見ると實に神人であつた。ひそかに白犬を遣つて天の羽衣を盜み取らしめて、一番下の妹の衣をとつて隱した。天女は人間に見つかつたことをさとつて、天上に飛び昇つたが、七人の姉たちは天に昇ることが出來たが、一番下の妹だけは昇ることが出來ず、遂に此の土地の民となつた。そして伊香刀美との間に男二人女二人の子をもうけた。これは風土記逸文で帝王編年記養老七年の條に引かれてゐるものである。

かういふ話に比べてみると、常陸國風土記所載のものはまことに簡撲なものである。白鳥里は和名鈔にも鹿島郡白鳥鄕と見えてゐる。また鹿島郡大和田村主石神社の梁牌の銘に「白鳥莊德宿鄕」とある由で、德宿村に白鳥社があるといふ。自分はまだ白鳥鄕を訪れたことはないが、先年、鹿島郡の神池から鹿島神社まで歩いてみたことがあつたが、殊に砂丘の松林の中に湛へられた神池を見て、坐ろにかういふ白鳥の傳說の面白味を感じたことがあつた。ちよ

うど夏向であるから、此の話を子供に聞かせてみようと思ふ。

二

うれしいうれしい夏休が來ました。

花子さんは、お母さまとお兄さまと一所に、海岸のお家へ出かけました。

二時間も三時間も、汽車に乘つてそれからまたバスに乘つて行きますと、松林の多い海岩に著きました。

花子さんもお兄さまも、大よろこびですぐ海岸に出かけました。廣々とした砂濱で、そこにはザァーッ、ザァーッとしづかに波が押し寄せては、かへつて行きます。波の引いた後の砂地は本當にきれいで、花子さんはお靴をぬいでぐん〳〵歩きました。

大きな波が追つかけて來ると、すぐ濱の方へ逃げ出します。波が引いて行くと、また歩き出します。まるで、波と追つかけこをしてゐるやうで、ひとりでにキャッキャッとさわぎたくなります。

花子さんは、お兄さまと一所に毎日海岸へ遊びに出かけました。

お兄さまは浮ぶくろを持つて、ぐん〳〵遠くの方まで泳いで行きます。花子さんはまだ泳ぐことが出來ませんので、一人で濱邊に待つてゐました。

お砂でお山を造つて、トンネルをこしらへて、ピーゴーと小さな汽車を走らせました。またお池を掘つて、水を入れましたが、お砂がぐん〳〵崩れてしまつてぢきに駄目になつてしまひます。

お兄さまは、ときぐ〳〵海から上つてきて、

「花子ちやん、何してゐるの。こんなお池なんか駄目ぢやないか」。

といつて、足で踏みつぶしてしまひます。

花子さんは泣き出しさうになりました。その中にお兄さまは

「僕はこんごは、あの岩のところまで行つて來るよ」

といつて出かけました。

花子さんはまた一人でせつせとお池を掘つてゐました。

「誰か手傳つて下さるといゝがな」

と思つて、一生懸命小さいシャベルで砂を掘つてゐました。

そのとき空の方でバタバタバタと音がしたと思ふと、花子さんのゐる前の波の上に、一羽の白い鳥がすうつと浮かんできました。

「あゝ、きれいな白い鳥が來た」

とびつくりして見てゐると、その白い鳥は波の上で二三度バタ〳〵と羽をひろげました。すると忽ち可愛い女の子になつてしまひました。その女の子は

「花子さん、一所にあそびませうね」

と、砂濱の上に歩いてきました。そして白いシャベルでするく〳〵とお砂を掘つてお池を作つてくれました。どんなに水を入れても、崩れないよいお池になりました。

「こんどはトンネルをつくりませうね」

といつて、長い長いトンネルを掘つてくれました。

かうしてたのしく遊んでゐましたが、もうおひる頃になりましたので、花子さんはお兄さまと一所にお家にかへりました。

あくる日、海岸へ行つてみると、また可愛いい女の子がどこからともなく、出てきて、花子さんにお池を掘つてくれたり、トンネルを作つたりしてくれました。

花子さんは夏休中ずつとここの可愛いゝ女の子とお友だちになりました。

（をはり）

（三六頁より）

その次は學校の畑のキャベツと、トマトを切紙した。キャベツは色をぬつて切つた。幼稚園の畑にも小さい作らあつてみんなに親しみ深いものなので大へん面白く、これもあとおまゝごとにまはりの葉を使つた。今度はキウリを、幼稚園のがなるのをまつてしやう。又南瓜も、夏大根も、茄子も、幼稚園に植ゑた材料が次々と出來るのが待たれる。

今夏の本會主催保育講習は本號廣告の通り七月二十七日から五日間東京女子高等師範學校に開催せられます。其の講習内容は、つとめて實際に即し、實際に直ちに役立ち得るやう、保育の新方向を示すもので、倉橋主幹は特に保育全體を見通して、幼稚園といふものゝ正しい姿を實際的に解明せられる筈です。全國多數の方々の御出席をお待ちします。

倉橋先生と戸倉先生の幼稚園講習が七月二十一、二の兩日、大阪私立幼稚園聯盟主催で大阪市に。八月十、十一、十二の三日間吉備保育會主催で岡山市に。同十四、十五、十六の三日間長崎市保育會主催で大村町長崎縣女子師範學校に開催せられる豫定と聞いて居ります。又、及川先生と小島先生の講習が三重縣社會課及び同保育會主催で八月上旬津市に開催せられる由です。